九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アジアの中の日本

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

https://hdl.handle.net/2324/1515757

出版情報：史跡で読む日本の歴史 : アジアの中の日本. 8, pp.1-14, 2010-08-10. 吉川弘文館
バージョン：
権利関係：

アジアの中の日本

服部英雄

無数にある遺跡のうち、国指定史跡として文化財保護法によって保護されている遺跡は一六六一件（平成二十二年三月末）ある。その過半は、アジアという視点なくしては理解できない。

古墳と馬具（騎馬戦術）

馬具、ないし馬の埴輪が出土する古墳は多い。それ以前、弥生時代の日本列島に馬はいなかった。『魏志倭人伝』にも『後漢書東夷伝倭伝』にも、「其地無牛馬」「無牛馬」とある。倭人伝の北九州に関する記述は正確であろう（周知の通り、それ以外の列島各地域については、あまり正確とはいえない）。魏使たちが確実に見た九州北部には、馬がいなかった。大陸にもっとも近い地域でも使われていなかったのならば、列島全体にも馬は使われていなかったと断言できる。これまでに縄文馬ないし弥生馬が発見されたといわれたこともあったけれど、真に馬の骨なのか、真に縄文時代、弥生時代の骨なのかどうか。疑問視する意見の方が多い。

秦の始皇帝は紀元前二一〇年に没した。兵馬俑は、戦車（馬車）が一三〇台、陶馬が六〇〇体余（馬車馬が五〇〇頭余、騎馬が一一六頭）、武士俑は七〇〇〇体余が確認されている。紀元前三世紀の秦の

皇帝葬送儀礼での軍隊編成が、兵馬俑によって可視化された。去勢馬が多数あるというが、葬送の場ではおとなしい馬が好まれたのであろうか。『魏志倭人伝』の時代より五〇〇年前に、秦では馬が重用されていた。

軍馬を操れない歩兵は、軍馬を操る騎兵にはぜったいに勝てない。どのように歩兵が陣容を構えていても、馬が数十頭も突進してくれば、みな逃げ、陣容はくずれる。騎馬に蹴散らされて、大けがをするか、殺される。馬は大陸から、馬を操る軍人集団とともにやってきた。古墳から出土する馬具や馬の埴輪は、まさしく最新兵器たる馬をもつものこそが、頂点に立ち得たことを語る。それが古墳の被葬者である。

おそらく軍事技術（馬、馬具）は高額で売り渡され、獲得した人物が大王になった。高松塚古墳の壁画、女性の衣装、天体図また四神（白虎・青龍・玄武・朱雀）をみれば、支配者（大王家）の一部が高句麗周辺（中国・朝鮮半島）からきていたと想定できる。

冊封・文字と中国年号

朝鮮半島では加耶の茶戸里遺跡から紀元前一世紀の筆と木簡を削った刀子が漆塗りの鞘に入って出土した。日本列島での漢字使用は、朝鮮半島での漢字使用には一世紀ほど遅れる。五七年（建武中元二）、後漢・光武帝に倭奴国が上表し、「漢委奴国王」の金印を得た。漢字を使用して上表した倭人（奴国人）は、漢字（中国語）のリテラシー（識字能力）をもち、「漢委奴国王」を記号ではなく、文字として読むことができた。次回冊封時には上表文に金印を押印するはずだった。これとは別に出土遺

物に書かれた弥生文字なるものも報告されている。ただし「田」が多いから、記号の可能性もある。また土器は二世紀後半から三世紀のものだから、奴国上表の方が古い。

奈良県天理市の東大寺山古墳から出土した鉄刀には後漢・中平年号（一八四―一八九）が金象嵌されていた。魏より冊封を受け親魏倭王に任じられた卑弥呼が得たとされる鏡（三角縁神獣鏡）には「景初三年」（二三九）・「正始元年」（二四〇）という中国年号がある。真に中国産なのか、あるいは国産なのか、論争があるが、いずれであっても、日本は中国年号を使用する社会に組み込まれていた。弥生時代から倭人（のちの日本人）は漢字を使用し、漢字によって上表した。権力中枢には大陸からやってきた人たちがいて、漢字を駆使して上表し、会話もできた。

下野・那須国造碑（国宝）には

「永昌元年（己）丑四月飛鳥浄御（原宮那須国）造」

とあって、唐年号「永昌元年（六八九）」が刻されている。金石文は列島が冊封体制そのままに中国年号社会だったことを示している。

藤原宮跡（特別史跡）および福岡市元岡遺跡から、大宝年号（七〇一―）を記した木簡が出土している。大宝年号はこれまでに元年（三点）・二年（八点）・三年（三点）が見つかっていて、諸国官衙が日本独自年号の使用を徹底したことがわかる。大宝以前の年号とされる大化、白雉、朱鳥年号については、日本年号を記した木簡は出土していない。該当年の木簡は何点も出土しているが、干支記載のみであった。おそらく今後も大化・白雉・朱鳥年号木簡の出土はないだろう。日本が独自の年号を使

用したのは事実上大宝以後であり、大宝以前には飛鳥浄御原朝（天武・持統朝）での地方機関は、おそらくは中央も含めて、中国年号を使用することがあった。高麗・朝鮮や琉球は、のちにも独自の年号は持ちえず、中国年号を奉じ続けたけれど、大宝律令以前の日本も同様だった。

仏教とアジアの科学技術

仏法は大陸から日本にもたらされた。仏教伝来以前は神（自然神や人物神）の信仰である。蘇我氏と物部氏のごとく、仏と神は、初期にこそ対立したが、まもなく一体化する。

東大寺大仏開眼会を挙行したのはインド出身の菩提僊那（Bodhisena）であった。宇佐八幡は神輿にのって開眼会に参加し、仏に帰依して八幡大菩薩となった。神仏混淆の達成である。東大寺大仏造立に至るまでの高度な技術は、アジア・中国の最高科学である。宇佐八幡の関係者は東大寺大仏にみる最新の技術と科学に、大きく瞠目し動揺もしただろう。建築土木のみならず医療・薬学・芸術に、東大寺が持つアジアの先端科学は卓越していた。東大寺は境内手向山に八幡神を守護神としてまつり、宇佐八幡は弥勒寺を開基して、神仏は一体化した。ただし双方が対等な合併であったとはいえそうもない。本地垂迹説で、神は仏の化身、権現となった。権とは仮である。開眼後、造東大寺長官になったのは遣唐使船にて二度入唐した吉備真備である（東大寺旧境内、宇佐八幡宮境内はともに国指定史跡）。

東大寺は総国分寺であったから、最新の科学は諸国の国分寺建設によって伝播していった。六六あった全国の国分寺は四三、国分尼寺は一一国のそれが、国指定史跡になっている。

仏教は天竺からきた。東大寺以外にも、善光寺仏は天竺・百済を経て日本に来たと十二世紀の「善

光寺縁起」（『扶桑略記』）にみえている。清涼寺釈迦像も天竺・震旦を経て栄よりもたらされた「二伝ノ仏」とされていた。日本仏教はアジア志向であった。仮託の可能性も大いにあるが、インド（天竺）僧が開山という寺院は少なからずある。九州博多周辺の大悲王院（雷山千如寺）や油山観音はインド僧もしくは唐僧清賀上人が開山とされる。法持聖清賀の名は「宮事雑事抄」（『大日本古文書　石清水文書』五）、大悲王院文書（建長七、建武二）にみえ、天竺僧の伝承は江戸時代初期にはあった（『筑陽記』宝永二、一七〇五―）。清賀上人像（国指定重要文化財、鎌倉時代後期の作）もある。インド仙人とされる法道上人も播磨・丹波で多くの寺院を開いた。

平安仏教は最澄や空海が中国浙江省天台山で学び伝えた中国宗教である。最澄は近江国分寺で学び、東大寺で受戒、空海も東大寺で受戒した。ともに八〇四年（延暦二十三）の遣唐船で中国に渡った。通訳義真は鑑真の弟子に中国語を学んでいた。東大寺では中国語基礎編を学び、唐招提寺では会話編のマスターができた。

平重衡焼き討ちによって東大寺大仏殿は焼失するが、再建は「入唐三度聖人」（泉福寺・旧延寿院梵鐘）、「渡唐三ヶ度」（『玉葉』寿永二年正月二十四日条）という重源による。その建築土木技術は陳和卿や伊行末ら中国人がもたらしたものであった。聖武天皇創建時の大仏殿は中央に柱を置くことなく広い空間を持った巨大で特異な建築であったが、建築技法の詳細は不明である。天平時代の遺物である転害門や法華堂、また飛鳥時代の法隆寺金堂の技術から推定するほかないが、巨大な柱と自重とバランスによって安定を得るような「柔」構造の建築であっただろう（その一例は頭貫技法、287ページ参照）。と

ころが重源が再建した大仏殿や南大門は、それまでの日本建築にはなかった新技術を駆使していた。東大寺南大門のように、異様なまでに上部が大きく、一見すると不安定な印象を受ける建物も、貫とよばれる枠組み支持力で絶対に倒れることのない頑丈な構造が導入された。「剛」構造である。新技術は大仏様とか天竺様といわれるようになる。これもまた中国人技術者による当時の大陸最新技術が導入された。

栄西や道元が中世にもたらした禅宗は中国直輸入の仏教である。臨済禅は臨済義玄の河北省臨済寺が原点とされる。ただし渡宋した栄西や道元は最澄や空海と同様に浙江省天台山で学んでいる。

日本に広まった禅宗は日常会話で中国語を重んじた。使う文字は漢字のみで、ひらがな、カタカナを用いることはなかった。中国（語）こそ最高の学問大系だった。禅宗様（唐様）といわれる中国風建築技術・文化も同時に伝来した。屋根は軒の反りあがった大陸風で、床には四半敷という四角なタイルを敷き詰めた。博多周辺にあった天台系山岳寺院でも禅宗化が進む。首羅山という寺院があり、経塚出土天仁二年（一一〇九）経筒に中国人（徐工）の名前があって、大陸文化を反映していたが、鎌倉時代には中国人が愛好した宋風獅子や中国産石材を用いた可能性の濃厚な四天王刻石塔（薩摩塔）が製作されて置かれた。

禅宗の出発点ともいえる博多聖福寺をはじめ、京都五山、鎌倉五山など主要禅宗寺院は多くが国指定史跡である。

禅を日本に伝えた栄西はどこで中国語を学んだのか。かれは延暦寺で得度しているから比叡山で中

国語の基礎を学んだだろうが、中国に渡る直前に博多のチャイナタウンに二ヵ月ほど滞在しており、ここでマスターしたのだろう。このチャイナタウンは文献史料に唐房（唐坊）として登場する。日宋貿易の拠点である。日本列島でもっともアジア的な街で、中国語の習得には不可欠な街でもあった。

中国人街唐房（唐坊）

唐房は(1)文献に残るもの、(2)地名に残るもの、(3)遺跡として残るものがある。(1)には大宰府・博多・宗像がある（大宰府は『中右記』部類記・長承元年七月二十八日条、大宰府唐坊は博多唐坊の可能性が濃厚、博多津唐房の語は、近江西教寺教典奥書、『栄西入宋縁起』、宗像唐房は『教訓抄』）。(2)地名は九州の北岸から山口にかけて、また九州南部、薩摩西南海岸に多数が残る。現在一五ヵ所以上のトウボウ地名の存在が指摘されている。漢字では当方、東方などとも書くがトウボウであって、ボは濁る。いずれも海岸部である。内陸にトウボウ地名はない。またトウボウ地名の場所から多く中国陶磁器、越州窯系磁器が出土する。円形井戸枠のような中国人系の遺構をともなうこともある。円形井戸枠は中国陶磁器を運ぶコンテナの転用であるとされている。福岡市姪浜干潟旧地のイマトウボウ（ニュー・チャイナタウン、字名は下山門に今東方、隣接して姪浜に稲当方）の周辺では大量の越州窯系磁器が出土して関係者を驚かせた。各地のトウボウは立地する地形も類似し、共通性がある。九州北部沿岸では干満差のある干潟の最奥にあるものが多い（宗像津屋崎、福岡市今津、姪浜、加世田市別府小湊当房など）。海岸部に直接に面するものもある（松浦市大崎東防、長崎市矢上東望、口之津町東方など）。

唐房とはなくとも、文献によって中国人居住地であると知りうる場所がいくつかあるが、やはり地

形は類似し共通する。国家的な貿易拠点であった箱崎宮の所在する箱崎津（多々良干潟）が干潟奥だった。宋人船頭がいたことが確認できる鳥飼も干潟（福岡市、草香江、樋井川河口、現在の大濠公園はその後身）であり、酷似する。

またトウボウ地名のある場所は、歴史的環境がいかにも中国人定住地にふさわしい。博多湾に隣接する今津湾・今津にトウボウ地名がある。瑞梅寺川河口干潟に面して、かつての船着に東方という小字が明治期まで存在していた。この（今津）トウボウ周辺には誓願寺や勝福寺がある。すでに紹介した三度渡宋の重源（東大寺復興）や二度渡宋の栄西（臨済宗開祖）が長期滞在した寺が誓願寺であり、宋人蘭渓道隆（建長寺開山）が鎮西探題北条氏の援助を得て開いた寺が勝福寺である。中国語が通用する地域であった。こここそが、再建東大寺・鎌倉建長寺・そして中国仏教たる禅宗などの鎌倉時代アジア文化のスタート地点であった。複数のトウボウ地名が残る姪浜にも渡宋僧南浦紹明が開山である興徳寺がある。

歴史文献・中国人系遺跡・地名・歴史的環境の四つが揃っているトウボウが、筑前国宗像郡津屋崎の唐坊である。平安後期から鎌倉期にかけて積極的に日宋貿易を展開した宗像大宮司の交易拠点である。宗像氏の遺品には阿弥陀経石とよばれる石製阿弥陀如来像があって、「大宋紹熙六年乙卯」と刻まれている。大宮司宗像氏は王氏、張氏といった中国人女性を妻とした。歴代宗像大宮司の母は中国人で、かれらは国際混血児だったのである。現在津屋崎唐坊の遺跡発掘地は史跡指定こそ受けていないが、津屋崎小学校内に唐坊展示館が設置されていて、整備され説明板もあり、申し込めば見学が可

能である。

蝦夷地と琉球

日本とアジア隣接域の境界は点であり、線であり、面でもあった。

十五世紀から十六世紀の蝦夷地では、アイヌ民族との境界線に、倭人が多くの城を築いた。松前十二館は多数が国指定史跡となっていて、上ノ国勝山館跡や志苔館跡では大規模な発掘調査がおこなわれた。最前線ともいえる勝山館ではアイヌ民族が用いた鹿角製マキリ（小刀）、シロシ（印）が刻まれた木製マキリ鞘ほか、アイヌ遺物が多数出土した。夷王山とよばれる館に隣接する和人墓群にもアイヌの屈葬土葬墓があって、シロシのある漆器皿が副葬されていた。最前線ではただ和人とアイヌの敵対があったのではなく、交流の時期が長かった。混血もあっただろう。和人とアイヌの間にはファジーな世界があって、マージナルな人々（境界人）がいた。かつては津軽海峡より南にあったアイヌ人・チャシの世界は十六世紀までに、この境界まで後退していた。

十七世紀・江戸時代になっても蝦夷地（北海道）は日本ではない。宣教師アンジェリスによれば、領主の松前氏自体が「ここは日本ではないから」と発言していた。日本天皇とは無縁な世界だった。

琉球もまた独立国で、中国から冊封され中国皇帝の年号を使用していた。外国である。日本天皇とは無関係で、中国皇帝の影響力のみがあり、島津侵攻後といえども、その関係は大きくは変わらないけれど、国王尚家王子は謝恩使・慶賀使として江戸上りをおこなった。琉球通信使である。オランダキャピタンや朝鮮通信使と同じく、友好の使者のはずだが、片務的な側面が強い。

琉球西端、八重山で墓碑銘に日本年号が登場するのは日清戦争における日本側勝利後で、それまでは清年号（光緒）を使用していた（石垣市立八重山博物館所蔵瓦証文）。通常使用する文字は漢字だが、日本の仮名文字も輸入して使っており、琉球王朝の公文書である辞令書（御印判、御朱印）は平仮名を主体とした候文で書かれた。日本語（ヤマトグチ）に近い発音で読まれたのであろう。ウチナーグチ（沖縄語）の「クワッチーサビラ（いただきます）」「クワッチーサビタン（ごちそうさまでした）」は和語（ヤマトグチ）の「活計候」に相当するというから、候は「サビラ」のように発音されていたのかもしれない。金石文に仮名が使われているものも多い。金石文（石碑）が多いこと自体が中国文化の強い影響である。グスク（城）も曲線を多用する中国式城郭である。琉球・沖縄独自の文化と史跡も多く、最高位のノロである聞得大君（チフィジン）の祈りの場、「せいふぁーうたき」（斎場御嶽）はその代表である。「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は二〇〇〇年に世界遺産に登録された。

倭城（日本城）

十六世紀末、豊臣秀吉は明に攻め入ろうとし朝鮮に侵攻した。それで日本の築城技術を駆使した城郭が朝鮮国内に多数築かれた。これを倭城と呼んでいる。朝鮮半島で築城された倭城（日本城）は、当然のことながら、日本の技術のみで築かれたわけではない。瓦は朝鮮にて朝鮮の瓦工が大量に焼いた。軍事施設といえども、この時代には屋根に瓦を用いた城郭は少なかった。慶長期の越後国瀬波郡図や日向国絵図での城郭描写でも、瓦屋根はほんの一部で、多くは板葺きだったように見える。大陸の技法で焼かれた優秀な瓦に日本の武将は瓦の長所・利点を強く認識した。瓦は日本に持ち込まれ、

普及した。滴水瓦というそれまでの日本にはなかった大陸風の瓦のデザインがとくに好まれた。朝鮮に出兵しなかった池田輝政の姫路城天守閣にも用いられたほどである。

キリシタン文化と遺跡

十六世紀には鉄砲とキリスト教（イエズス会）が伝来する。日本はヨーロッパにつながった。鉄砲には火薬が必要だったが、日本では火薬の材料である硝石と硫黄・木炭のうち、硝石が採取できなかった。キリスト教宣教師がキリシタン大名であった有馬晴信を軍事支援し、中国から硝石を提供した（一五八〇年十月二十日付豊後発信、ロレンソ・メシア師のイエズス会総長宛、一五八〇年度日本年報）。永禄十年（一五六七）大友宗麟は宣教師に硝石の提供をつよく要請し、宿敵毛利氏に硝石を渡すことのないようにといっている（永禄十一年十月十七日、マカオ司教ドン・ベルシオール・カルネイロ宛書簡）。布教活動と軍事物資の提供が一体化していた。

古墳時代に最新の軍事技術である騎馬戦法がアジア大陸からもたらされたように、戦国時代末期に最新の軍事技術、鉄砲と硝石がヨーロッパからアジアを経て日本に持ち込まれた。勝者となった人々は織田信長をはじめ鉄砲を駆使したけれど、最新技術を持ち込んだヨーロッパ人や中国人が自身で日本を征服することはなかった。馬と銃によってスペイン人に征服されたアステカ王国（一五二一年滅亡）やインカ帝国（一五三三年滅亡）とは異なっていた。日本人は先進国たる中国や朝鮮よりも早く鉄砲技術を改良し、駆使した。優秀な刀鍛冶は鉄砲鍛冶に変身し、大量の鉄砲を生産して、東南アジアに輸出するようにまでなる（『イダルゴとサムライ』）。

キリスト教にはカソリックとプロテスタントがあって、激しく対立し、オランダ独立戦争のごとく事実上戦争状態になった。天草島原の乱においては新教国オランダが徳川幕府と軍事同盟を結んだ。原城攻撃に参戦し、城内の一揆に対してオランダが大砲を撃ち込んだ。幕府の軍事同盟国に敵対する国は反幕府勢力と結びつきやすい。旧教国ポルトガルは、キリシタン一揆と結びつく可能性が濃厚であり、事実そうした方向を模索していたであろう。天草四郎ら四人の首は出島にあったポルトガル商館前に晒された。日本の鎖国（海禁）政策の徹底化によって、ポルトガルは日本から排除され、軍事同盟国オランダが通商の国となった。島原の乱に関しては原城と出島（出島和蘭商館跡）、富岡のキリシタン供養碑が国指定史跡に指定されている。

本書では豊後府内のほか各地のキリシタン史跡を紹介した。鹿児島城花十字紋瓦は出土時にはキリシタン遺物として認識されていなかった。島津氏といえば丸に十字の家紋だから、たんに唐草文十字紋瓦とされていたけれど、研究の進展によりキリシタン遺物（花十字紋瓦）として再確認された。事例はアップデートで増加する。しかし地方自治体の遺跡への取り組みが、キリシタン出土遺物の出土状況を左右しているのではないかと危惧もされる。

現在長崎市文化財保護担当部局は興善町・万才町を周知の遺跡としており、ビル建設など開発行為があったときには発掘（学術）調査が可能な体制である。この二町という範囲だけでは十分とはいえないかもしれないが、それでも、この周知の遺跡化（遺跡台帳への登録）の結果、長崎市では毎年のようにメダイや花十字紋瓦のキリシタン遺物出土例が増加している。しかしそういう体制にはない自治

体もある。たとえば福岡市教育委員会では近世城下町を行政発掘の対象となりうる「周知の遺跡」の扱いとしていない。城下町でビル建設があっても発掘調査をしない。福岡博多は布教拠点であったことが明確で、黒田如水（ドン・シメオン）の葬儀を執り行った教会があった。だがメダイ・クルスなどキリシタン遺物はこれまでにいちど博多（旧奈良屋）小学校の発掘（二〇〇〇年）で出土を見ただけである。その後、現在までキリシタン史料の増加がない。近世の発掘調査例自体が少ない。福岡市に限ったことではないのかもしれないが、このままではキリシタン遺跡の検出には今後も期待が持てない。

文化庁には史跡の指定基準がある（昭和二十六年文化財保護委員会告示）。「我が国の歴史の正しい理解に欠くことができず」且つ「学術上価値ある遺跡」を指定すると定めてある。ここにはさらに各種の遺跡が分類して列挙されていて、最後の九番目の項目が

九　外国及び外国人に関する遺跡

となっている。この基準九が適用されているものは現段階では

了仙寺（静岡県下田市）
玉泉寺（静岡県下田市）
朝鮮通信使遺跡　鞆福禅寺境内・牛窓本蓮寺境内・興津清見寺境内（広島県福山市・岡山県牛窓町・静岡県静岡市（旧清水市））
小泉八雲旧宅（島根県松江市）

平戸和蘭商館跡（長崎県平戸市）
出島和蘭商館跡（長崎県長崎市）
シーボルト宅跡（同上）

の七件である。了仙寺・玉泉寺は下田条約とペリーに関係する遺跡である。アジアとの関係を示すものは唯一、朝鮮通信使遺跡となる。江戸時代の通信使は朝鮮と琉球に関わるものがあった。隣国との交友を示す。このように直接外国に関係するものとして指定された史跡（基準九）は少ないけれども、一七〇〇件に近い国指定史跡、およびそれ以外の遺跡群もまた、実は日本とアジアの関係をよく示す。

参考文献

飯沼賢司『八幡神とはなにか』角川選書、二〇〇四年
井原今朝男『中世とのいくさ・祭り・外国との交わり』校倉書房、一九九九年
沖縄県教育委員会『金石文　歴史資料調査報告書Ⅴ』一九八五年
服部英雄「博多の海の暗黙知・唐房の消長と在日宋人のアイデンティティ」『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』櫂歌書房、二〇〇六年
服部英雄「首羅山の歴史と東アジア」『首羅山遺跡』久山町教育委員会、二〇〇八年
服部英雄「宗像大宮司と日宋貿易―筑前国宗像唐坊・小呂島・高田牧―」『境界からみた内と外』岩田書院、二〇〇八年
服部英雄・千田嘉博・宮武正登編『原城と島原の乱』新人物往来社、二〇〇八年
平川　南編『古代日本文字の来た道―古代中国・朝鮮から列島へ―』国立歴史民俗博物館、二〇〇五年